

『夜のピクニック』

恩田 陸／著 新潮社（2004年）

北高には鍛錬歩行祭というものがある。朝の八時から翌朝の八時まで歩くという行事だ。三年生にとっては、修学旅行がないぶん最後の思い出づくりとなる。最初は楽しく歩いているのだが、次第に足の裏が、体中の筋肉が悲鳴をあげだす。とりあえず、前に進むことしか考えない。頭の中がからっぽになっていく。雑音が消えていく。自分と向き合う二十四時間が始まった。



『ぼくだけの山の家』

ジーン・クレイグヘッド・ジョージ／著
茅野 美ど里／訳 偕成社（2009年）

ぼくの名前はサム。ぼくは今の状況に満足していない。曾祖父のグリブリーじいさんがキャツキル山脈に土地をもっていたという。その土地はまだグリブリー名義のままだ。よし、ぼくはキャツキル山脈に家出をするぞ。これからは、自分で考え自分でなんでも解決するんだ。

一年間自然の中で生活するサムの成長物語です。

巻末には「この本に出てくる森の生きものたち」についての解説もついています。

『わたしが冒険について語るなら』

三浦 雄一郎／著 ポプラ社（2010年）

今年の5月に三浦雄一郎さんは、80歳という年齢で3度目のエベレスト登山に成功しました。80歳での成功は最高齢登頂者です。そんな強者の三浦さんが人間にとって冒険とは何か、冒険したいと思う心はどこからきたのかを語ってくれます。

三浦さんの冒険は幼稚園のころからはじまっていた。誰もが知っている冒険家になった三浦さんの人生をわくわくしながらのぞいてみませんか。



『岳物語』

椎名 誠／著 集英社（1989年）

このお話は父親である「私」の目線で物語がすすんでいきます。

両親が山登りを好きだったことから、山岳の岳と名づけられた岳少年。坊主頭でケンカも強く、保育園では一日中仲間とあばれ回る元気な子ども。小学生になった岳は釣りに凝りはじめ、自分の小遣いで釣り道具をそろえます。それ以来、岳の生活は釣りを中心に。

どんな毎日が待っているのでしょうか。



『学べる！山歩きの地図読み』

佐々木 亨／著

山と溪谷社（2012年）

山に登るとき、みんなは地図を持って行きますか。よく利用されている登山ルートでも思わぬところで道に迷ったりします。普段から地図をみて歩くクセをつけると危険を回避することができます。「地図ってなんだか難しそう」「まず地図の見方がわからない」そんな方でも大丈夫。本書では、地図の約束事、地図の読み方、コンパスの使い方まで詳しく載っています。

『南極大陸単独横断行』

大場 満郎／著 講談社（2001年）

冒険ってどうやってはじめるのだろう。準備の仕方、スポンサー集め、いろいろとハードルがある。この本は冒険をはじめるとにあたっての準備の様子からくわしく書いている。冒険家はひとりで成功しているのではない、助けてくれる人がいてこそ成功なのだ。

南極大陸単独横断中のことは日記として記してくれている。その時何を感じ、何に困り、また、自然のすばらしさ、自然の驚異など思ったままを書いている。

